

悲劇論

悲劇の条件は「悲劇性」

2022/07/13



私たちは、ワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》を観て、とても感激します。どこに感激したかと言え、その主人公二人の「悲劇性」においてです。そのことをお話いたします。悲劇を悲劇として成り立たせるには、いろいろな条件が必要です。それは、以下のとおりです。

1 主人公は一人

まずは、一人の主人公を必要とします。一人あれば良いのです。歌劇《ノルマ》の場合は、ノルマ、一人で十分です。一緒に火刑台に上がるローマの将軍ポッリオネも、妹巫女のアダルジーザも、二人の子供も、祭祀長で父のオロヴェーズも、ドルイド教の信者たちも、すべては脇役です。シェイクスピアの「ロメオとジュリエット」も、ロメオさえいればジュリエ

ットはいらないのです — といったらシェイクスピア学者のアンドリュー・ブラッドレイに叱られるでしょう。彼は、「悲劇の物語は、本来、一人物に関わるものだ」と言いながらも、シェイクスピアの悲劇「ロメオとジュリエット」も「アントニオとクレオパトラ」も、どちらも、「主人公」(ヒーロー)と「女主人公」(ヒロイン)の二人の人物に関する物語なので、この二人は同等に物語の中心となるものであり、このような「恋愛悲劇」は双方を悲劇の主人公とすべきだ — というのです。(『シェイクスピアの悲劇』岩波文庫[上]17頁) なるほど。では、《トリスタンとイゾルデ》も、二人で一人です。ここは、碩学(せきがく:大学者)の顔を立てて、ジュリエットとクレオパトラとイゾルデは、悲劇の女主人公と認めましょう。そうになると、マクベス夫人やオセロの妻のデズデーモナやハムレットのお気に入りオフィーリアはどうなるのでしょうか? この人たちに「悲劇性」があれば、当然、「悲劇の主人公」になれます。マクベス夫人はさておき、デズデーモナとオフィーリアには一票入れたい思いはします。可哀想です。だれよりも、「悲劇の主人公」に違いありません。

しかし、私は、歌劇《ノルマ》に出てくるローマの将軍ポッリオネは、悲劇の主人公とは認めません。なぜなら、彼は、このオペラでは、ジュリエットやクレオパトラやイゾルデほどには、その性格も悲劇性も災厄(さいやく)も深刻には語られていないからです。また、その苦しみや悩みや愛や葛藤についても、真剣に描かれていないからです。ポッリオネは、ローマの将軍であるという自分の立場をまったく認識していません。全く、オセロではありえません。ノルマと自分とアダルジーザとローマとドルイドの被る悲劇に対して淡白でお座なりで、それを「根本的な悲劇の大問題」として認識していないのです。彼が最後に、ノルマと一緒に死に赴くのは行きがかりにすぎません。彼がここへやってきたのも、アダルジーザと一緒に逃げようと思っただけのことでした。ノルマのことなどこころのどこにもなかったですから。そんな無情な男を「悲劇の主人公」として讃えることはできません。《ノルマ》は、「恋愛悲劇」ではないのです。

2 主人公は死ぬこと

そして、悲劇の主人公は、必ず死ななければなりません。そのため、シェイクスピア劇で、主人公が生き延びる『トロイラスとクレシダ』や『シムペリオン』は「悲劇ではない」と碩学はいいます。オペラでも、「タイトル・ロール」(オペラの演題になっている主人公)はすべて死にます。《ドン・ジョバンニ》、《椿姫》、《カルメン》、《ランメルモールのルチア》などは、悲劇です。《リゴレット》では、娘のジルダは死んでも「タイトル・ロール」の本人は生き延びるので悲劇ではありません。同様に、《ボエーム》(「タイトル・ロール」のボエームたちは4人の男の芸術家)も、《道化師(たち)》も、悲劇ではありません。《ホフマン物語》のホフマンは生き延びて詩を書きつづけるので、本人にとっては失恋の悲劇であっても、本来の意味で「悲劇」ではありません。ワーグナーの《さまよえるオランダ人》はどうでしょうか? 彼は、ゼンタと一緒に天国へ行くのですから死んだのでしょう。でも、天国へ行くからには悲劇ではありません。その意味で、《さまよえるオランダ人》は喜劇であると言わなければなりません。

3 主人公は死ぬまで苦しむこと

悲劇の主人公の一生は、突然の苦悩と災厄と没落を経て、最後には死で終らなければなりません。そしてこの死にいたる苦しみという病は、ある優れた顕著な人物の上に降りかかる、並々ならぬ「悲劇性」をもった立派な性質のものでなければなりません。薬や祈祷や名医によってたちどころに治るものであってはなりません。それは、いかにも哀れであり、世間の人々の同情と憐みを買うものであり、極めて公の哀れさや憐みでなければなりません。例へば、病気や貧困や家庭的な心配ごとや俗にある犯罪や恐喝や迫害などにさいなまされていき、徐々に悩み死んで行くやうなものであってはなりません。これらは、だれにでも起きる日常的で、家庭的で、茶飯事なものであり、特別に「悲劇性」をもつものではないからです。

悲劇の主人公の悩み苦しきは、その人物特有の「性格と環境」から生じた、やむにやまれぬものでなければなりません。その人の「性格」こそが運命なのであって、「人は、性格にあった事件にしか出逢わない」（小林秀雄）のです。

マクベスが悲劇的なのは、彼自身、脆弱(せいじゃく)な性格で、人の意見に感化されやすく、その環境は、野心家の妻をもっていることです。ハムレットは、懐疑的な哲学を大学で学び、父親が叔父に殺され、母は叔父と姦通しています。リア王は、退位寸前の耄碌(もうろく)した疑い深い老人であり、息子はなく、得体の知れない三人の娘をもっています。オセロは、雇われ傭兵の好戦的なムア一人(黒人)であり、妻はヴェネチアの名門の出で一番の美人です。ハムレットは、神経衰弱の呪われた皇子です。「悲劇的」です。

4 主人公は、最高の地位の人であること

悲劇は、常に「高い地位の人」に起きるものです。悲劇は、一国を支配する王侯君主や将軍や祭祀長や巫女に特有なものであって、社会的重大さを持ち、偉大で威厳を兼ね備えた名家の人々を対象にしたものなのです。トリスタンは次の王さまであり、イゾルデは王妃です。シェイクスピアの「四大悲劇」の主人公オセロはヴェネスの将軍であり、リア王はブリテン(英国)の王さまであり、マクベスはスコットランド王であり、ハムレットはデンマークの皇子であり、それぞれ一国を代表する人物たちです。この主人公たちが出逢う運命は、全王国、全人民の平和に大きな影響を及ぼします。そして、これらの人々の失脚は、すべて最高の地位や絶頂の栄誉から一気に失墜して泥にまみれ、すべてを失って無惨(むざん)にも死ぬのです。栄耀栄華に飾られた偉大な人物が、

運命や宿命や神や悪魔の気まぐれによって高(たか)転(ころ)びに転ぶとき、その原因が、俗世間的な恋の悩みであれ、出世願望であれ、そこには最高の偉大さや威厳が、最大のエネルギーを伴って轟音(ごうおん)のうちに瓦解(がかい)するのです。

この街の屋根屋の親父が、屋根から落ちて死んでも、悲劇ではありません。残念ながら、それは単なる事故に過ぎません。むろん、だれが死んでもそれは可哀想であり家族や親族や友人にとって大きな悲劇ではありますが、

「悲劇性」はありません。一般の人の死が舞台の上で「悲劇」になるのは、19世紀末のヴェリズモ・オペラの時代になってからのことです。ブラッドレーはいいます — 「悲劇とは、高貴な地位の人物が特異な災厄を蒙(こうむ)ってついに死んでいく物語である」。

5 すべての悲劇はエピローグで喜劇となる

例えば、悲劇「マクベス」です。悪逆非道なスコットランド王マクベスは殺されます。殺したのは、マクベスに追われて隣国のイングランドへ亡命していた前スコットランド王ダンカンの長男マルカムとマクベスに妻子を殺されたマクダフと多くの亡命者たちです。マクダフはマクベスの「首級」(しゅきゅう:討ちとった敵の首)をマルカムに献げます。首を前にしたマルカムは即位を誓います。「いづれ遠からんうちに、諸君のそれぞれの忠勤を取り調べてお報いを致す積りです。各人に感謝します。さ、どうか、スコーンの即位式に参列して下さい」。これで、本当に幕が降ります。従って、悲劇「マクベス」はハッピーエンドで終わり、喜劇となります。

別のエッセイで述べましたが、モーツァルトの歌劇《ドン・ジョバンニ》もタイトル・ロールが死にます。でも、そのおかげで、従者のレポレロも、妻ドンナ・エルヴィーラも、騎士長の娘ドンナ・アンナとその許婚ドン・オッターヴィオも、農民の娘ツェルリーナとその許婚の農夫マゼットも、全員自由になり新しい幸せを求めて出かけます。従って、これもまた喜劇です。歌劇《ノルマ》には、ノルマが死んでもだれにも。どこにも、救いはありません。全くの悲劇です。

